

2020年5月31日(日)

上尾合同教会

聖書 エゼキエル書 36章 26~28節

ヤコブの手紙 1章 16~18節

説教「ペンテコステ礼拝—新しい霊が私たちの中に」

武田真治牧師

皆さま、お元気でお過ごしでしょうか。今日はペンテコステ礼拝です。ペンテコステは教会のお誕生日とも言われます。この世界に初めて教会という存在が、生まれた時のことを覚えながら、今もこうして私たちに、教会という群れが与えられていることを感謝しながら捧げる礼拝だと言ってよろしいのではないのでしょうか。

初めて教会がこの世界に誕生した様子を、聖書はこう記しています。皆さんもよくもうご存知のところなんです、もう一度読んでみたいと思います。使徒言行録第2章1節から4節(新約聖書214頁)「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分か

れに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」よく言われますことは、ここに教会が誕生するいくつかの条件があったのだということを言われます。一つは、「五旬祭の日」これは、日曜日なんですね。ペンテコステは、イースター(イエスさまが復活なさった朝)から数えて、50日目の礼拝が、ちょうど日曜日になります。そこで、一同が一つになって集まっていたということですね。やはり教会はそうじゃないでしょうか。一つに集まっている。バラバラに好き勝手なことを考えている、ダメでしょうし、集まって、じゃあ何をしているのか。ただ歌っている、あるいは、ダンスしている、楽しいことしてる、食事してる。それで、教会かというところじゃなくて、一つ心になって神様を礼拝する。この主の日に集まっていた。二番目、一同が一つになっていた。そして、三番目に神様を礼拝していたんだ。この条件が揃って初めて聖霊が上から降った。そして教会が誕生したんだと。逆に申しますならば、教会はこの三つの条件が整っていて、初めて教会・礼拝と言うことなんですよ。聖霊が注がれるんだと。すなわち、日曜日にみんなで集まって一つになって、礼拝を捧げている。そこに聖霊が降る。どうでしょうか。

新型コロナウイルスで自粛状態になっている今です。一日も早く、本来の教会の姿を取り戻したいな、あるいは、取り戻させていたいただきたいなと願っているんですけども、同時にそれぞれの家庭で行っている礼拝は、礼拝じゃないのか。ダメなのか。そんなことないということです。日曜日で、主日、そして二人または三人でもいいから、人たちがそこに集まっている。そして神様を礼拝しようとしている。それが、そこに教会がある。それぞれの各家庭での礼拝というのは、まさに礼拝として成り立っているし、教会と呼んでもいいくらいだよと、そう言って構わないと思います。この点がカトリック教会と違っている点でありまして、カトリックの教会の考え方、ペンテコステについてもそうなんですけれども、ここで主の日、一同が集まっている。我々は礼拝をしたと考えるんですけども、集まっていた時に、その人たちは何をしていたのかとカトリックの人たちは考えますかという、聖餐式をしていたんだと、考えるんです。確かに、この場所はイエスさまと弟子たちが最後の晩餐に執り行った、あの場所に集まっていたんだろうと考えられますね。ですから、当然日曜日ですし、イエスさまのことを覚えながら、聖餐式をそこで執り行っていたと考える。そこに聖霊が降ったんだと。教会が成立したんだと。ですから、教会の中心は聖餐なんだということですね。

もちろん、私たちもここで弟子たちは聖餐を執り行ったと思います。カトリック教会は、だから礼拝、あるいは、教会というのは、ミサを執り行うのが礼拝であって、ミサを執り行うことができる司祭がいて初めて礼拝が成り立つと考えますね。したがって、司祭さんがおられないところは、礼拝

が成立しないんですね。また、その教会というのは、教会として成り立たないと、カトリックの人たちはどこかで考えているところがありますね。ただ、私たちプロテスタント教会は、実はこの後、使徒言行録 2 章で一人ひとりに聖霊が留まった後に、4 節「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。」そして、いろんな人たちの言葉を語って、人々にイエスさまのことを話し出すんですね。そして、ペトロの説教がこの後に出て参ります。

つまり、最初の教会、聖霊が注がれた教会というのは、どうなったかという、霊が語らせるままに出て行って他の言葉、伝道していった。聖書の言葉・福音をのべ伝えていった。これが礼拝なんだということ、あるいは、教会なんだということです。私たちは、そのことをとても大事に致します。ですから、礼拝も説教がない礼拝はないと、我々プロテスタントは考えます。たとえ礼拝の中で聖餐式を執り行わなくても、説教が、御言葉が語られること、解き明かしが行われなようなことは、礼拝として認められないです。牧師が居なくても、信徒の方が聖書の言葉に対する奨励や立証をする、証しをなさる。そのことで礼拝は成り立つんです。ですから、葬儀式や結婚式なども、それが礼拝だと、聖書の言葉が語られ、説教がなされるんですね。御言葉が語られる。それがあって、初めて礼拝だとなるのであります。ですから、今私がこうして、私の拙い御言葉の解き明かしを、予め録音しておりますけれども、これが皆さまのところで聴かれて初めて、語られて、その場所が礼拝なんです。御言葉が語られている、それが礼拝なんです。聖餐式が執り行われなくても、聖書が開けられ読まれ、御言葉の解き明かしがなされた。その場所が礼拝だと、その場所が教会だと言って構わないんですね。

そういうことが、とてもよく表されておりますのが、今日読みましたヤコブの手紙第 1 章 16~18 節が大事な箇所なんです。ここを今日はもう一つ共に読みたいと思います。新約聖書 421 頁「わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。」今読んでおりました、お聴きになった方が、正直何を言ってるのと、難しい言葉づかいがあったり、よくわからないなという言葉が多いと思います。まず、この読み解く鍵は、17 節です。「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。」これは、神様という方は、私たちに「良い贈り物、そして完全な賜物」というものを与えてくださる方だよということを言っているわけです。「光の源」というのは、光あれと創世記 1 章です。天地創造のところ。「最初に光あれ。光があった。そして昼

と夜とを分けられた。上の海とか、下の海、陸地を分けられた」そのように、天地創造の最初に、「光あれ」と。光の源という意味ですね。そして、動物を創り、植物を創り、私たち人間を創ってくださいました。命を与え生きよ。逆に言うと、私たちがこの世界で、この地で生きていく、水や陸や食物、そしてこの環境ですね。全て神様が私たちに、生きよと与えてくださった良い贈り物。完全な賜物。たとえば、愛とか慈しみとか、人間に、とっても必要なものというの、光の源である。希望とかそういうものの源である御父から、与えられるもの。来るものなんだよ。そうふうに、言われていますね。

そんな神様の状態といえますか、神様に対して邪魔をする存在というかな。16 節「わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。」どんな思い違いをしちゃいけないのか。実は、その前に出てきます。13 節から。「誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」これは、何を言っているかという、神様は良いものを与えようとしてくださっているだけけれど、それを拒むというか、阻むというか、それがうまく届かなくなるのは、私たちの側の問題で、人はそれぞれ自分自身の誘惑ですね。14 節「唆されて、誘惑に陥って、そしてその結果、罪を生み、罪が熟して死を生みます。」自ら滅びへと、どこかで私たち、走っていないかということですよ。欲望ということから、天地創造のアダムとエバのことも考えながら、語られているわけですよ。取っかきいけないといわれていた禁断の木の実を食べちゃったということですよ。欲望に駆られてしまって、やらなくてもいいことを、誰も見ていないから、ちょっと悪いことをやってみようかとか、あるいは、どうしてもあれがしたい。いろんなそういう思い、私たちも経験がありますけれども。その結果、実はひどいことになったり、うまくいかなかったり、人間関係が壊れちゃったり、もうそのことでずっと私たち、その苦しみにあったりする。自分自身の欲望に惹かれ、そそのかさされ、誘惑に落ちるんだと。その結果、それが罪を生み、その罪が熟して死を生んでいくんだということですよ。

ちょっと余談に聞こえてしまうかもしれませんが、今回の新型コロナウイルスの状況を見ておりますと、感染経路が明らかになってきました。一方で、医療関係でクラスターと申しますが、ウイルスの拡散がなされたりしたこともありますし、フェリーの中で広がったということもありますけれども、途中から夜のお酒を飲みに行く場所とか、バーとかの歓楽街に出かけて行って、限られた狭い閉鎖空間で、話をしたり、濃厚にお相手と接触したりすることによって、ウイルスがその場

所でどんどん拡散されていったということが出てきましたよね。なるほどと思っていたわけでありませぬ。しかもダメだというので行かなくなったわけですが、緩和されたら、またすぐそういう場所に行き、韓国もそうですよね。そして、ウイルスの感染が広がってしまった。まさに、欲望に駆られ、そのかさね、誘惑に陥る状況なのかなと、人間は本当にそういうところがあるなと教えられるわけですね。

ここで大事なことは、何を言っているかということ 15 節。「そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」結局、私たちの大事なものを、私たちがずっと大切にしていたと思っているものを、取り去ってしまう存在は何かということ、それは<死だ>と言っているわけですよ。16 節「わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。」神様は私たちに<生きよ>と言っている。命を与え、いろんなすてきなものを全部与えてくださっている。けれども、その良きものや、ずっと一緒に居たいと思っているものを失っていく、取り去ってしまう存在は何かということ、死だということですよ。死という存在が、どんどん命を取り去ろうとするということですよ。それは、ヤコブの手紙を読んで行けばわかるんですが、そういう死とか虚しさがある。引きずり込もうとする存在がいるんだと。それが悪誘惑だと、13 節にありましたね。悪魔とか悪霊とか、ヤコブの手紙ははっきりと言うんですね。悪的な存在が居るんだ。それが、神様に反抗してそして、死へと我々を引きずり込もうとする。誘惑をしたりして、我々はそれに唆されて、誘惑に陥って、そして結局罪を犯して、死への歩みを早めてしまうんだ。そういう状態は、その混沌へと、虚しさ、虚無へ引きずり込もうとする悪的な存在というのが居て、それが滅びへと導いていくんだという状況があるんだと。それに対して、16 節「わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。」これ何を言ってるかということ、私たちはどうかすると、それを神様のせいにするんですね。神様がなんでこんな苦しみにあわせるんだ。神様が取り去っちゃったとか、神様が私にこんな辛い運命を与えて、神様って、なんて意地悪と思ってしまう。けれども、ヤコブの手紙でヤコブさんが言ってるのは、勘違いしてはいけません。思い違いをしてはいけません。17 節「良い贈り物、完全な賜物」つまり、神様は良いものを私たちに与えようとしているのではないか。神様は<生きよ>と言って、光の源である御父から全て良きものを与えられているのではないか。神様が敢えて私たちに困らせるようなことをしないよ。勘違いをしてはいけません。思い違いをしてはいけませんよ。

「光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。」神様は光を創られた。光が当たらないところが陰になるわけですね。その裏が陰にな

ったりするわけですね。そんなことないんだ。光を創った方、光の源なんだから、ひねくれて、裏にこんな悪い考えがあって、その考えで苦しみを与えたり、そんな風なことを考える方じゃないんだ。私たちに常に、喜びと支えと祝福とを与えようとしてくださっている方なんだ。そう信じなさい。思い違いをしちゃいけないよ。この思い違いをするなというギリシャ語は、<プラナオー>という言葉ですね。これは、迷うとか横道にそれるという言葉から来ております。騙されるな、とも訳している言葉なんですね。騙そうとする存在が居るんだ。それが、先ほど申しました、悪・悪霊で神様に逆らう存在なんですね。それが人間を、騙そうとするんだ。どういうふうに騙そうするかというと、神様が悪い、神様がこういう風になっている。神様が意地悪なんだ。そういう風に思わせて、結局神様から離れさせようとしていくんだ。でも、それ、離れた結果どうなるか。それは、死に向かう、滅びへと向かっていくんだよ。滅びへと向かわせる存在が、この世界には居るのだというのが、悪・悪霊だ、悪魔だということをやコブの手紙は語っているんですね。どうでしょうか

先ほど申しましたように、神様とはいつも私たちに良き贈り物を通して、<生きよ>としてくださっているんだ。そして神様は<光の源>なんだから、そんな陰とか裏の想いとか、そんなものないんだよと言っているのが 17 節でしたね。実際その証拠というか、それが、18 節なんです。「御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。」神様というのは、私たちを生んでくださった。命を与えてくださった。まさに、それは、<生きよ>と、ここに、<命で満ちよ>という。そして、いわば創られた物、<初穂>、あなたを通して、さらに命が豊かに生きていく、与えられていく存在となるように願っておられるのであって、滅ぼそうとか亡き者にしようとか、そんなことは考えておられないというんです。私たちを生んでくださった方ですよ。この「真理の言葉によって、私たちを生んでくださいました。」この読み方というのは、実は二つの意味があります。一つの意味は、今読んで参りましたように、<天地創造>そしてその命を与えて、そして全ての良きものを与えて、生きよとってくださっているという読み方ですね。そうすると、「真理の言葉によって、私たちを生んでくださいました。」というところの<真理の言葉>とは何かということ、これは、創世記で<光あれ>といった言葉ですね。ヨハネによる福音書(新約聖書)の冒頭で「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。」あの<言>です。真理の言葉。神様の意思、御意思と言う風に言ってもいいかもしれない。神様が本当にそう思われて<光あれ>とおっしゃって、この世界を創られて、そして<人間よ、地に満ちよ>とってくださっているその思いのままに、命を私たちに与えてくださって生かそうとしてくださっているんだよ。そして、私た

ちがその<命の源>祝福の源として、生きて行って欲しい。初穂となって行って欲しい。さらに、そう願っていらっしゃるというのが、一つの読み方なんです。

実は、もう一つの理解があるんですね。ただ先ほども言うておりますように、一方で、悪的な存在がいるわけですね。それは、滅びへと死へと引きずり込もうとする存在があると言う時に、「御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。」この<生む>というのは、命を与えたという意味と同時に、新しい命へと生きるようにしてくださった。私たちに信仰を与えてくださった。そして、新しく生きる命を与えてくださった。そういう理解が、もう一つのこの聖書の箇所を読み方なんです。新しい命を与えようとしてくださったんだ。悪的な力に負けないように、それを凌駕し、それこそ復活の命ですよ。天へ、その死を超えていく。滅ぼそうとするその死を、虚無へと死が引きずり込もうとする、その悪的な力を乗り越え、それを凌駕して行って、死を乗り越えて新しい命、復活へと繋がる、天の御国へと繋がる、その新しい命に私たちを生んでくださった。そういう風に読める言葉なんです。そうすると、18節「御父は、御心のままに」これは、<御心にしがって>とも訳せる言葉でございまして、ここにイエスさまをこの世界に送ってくださって、という想いが込められているとも読むことが出来ます。私たちを救おうと、本当の命、新しい命へと生かそうとするために、イエスさまをこの世に送ってくださって、十字架と復活を通して私たちに新しい命へと招いてくださったんだと、そのことがここで語られているのではないかと。どうでしょうか。

そうすると、この真理の言葉によってというのは、私たちに救いを与える、イエスキリストの救いを受け入れる、イエスさまの救いを受け入れる。そのために、真理の言葉によって、つまり、福音の説教ですね。伝道です。ペンテコステに、教会に聖霊が与えられ、そして人々が語り始めましたね。まさに初穂じゃないですか。初穂として、その初穂は何の初穂か。新しい命、キリストの福音を受け入れた者たちの初穂なんです。そしてその人たちが、周りの人たちにいろんな言葉で語りかけたことによって、キリストの福音がどんどん広まっていくわけですね。そして、その福音を、説教を、御言葉を聴いて、さらに救われ新しい命へと生き返っていく。新しい命を与えられていく者が続くわけです。まさに、真理の言葉によって、私たちは伝道によって、その御言葉によって、福音の言葉によって、それを受け入れることによって、私たちが新しく生んでくださいました。生きることが出来るんだ。信仰をもって、そして、死をも恐れない。死を乗り越えて天の御国へと繋がる。永遠の命、復活の命を与えてくださったんだ。その滅びの悪や、悪的な力を乗り越えるために、キリストをこの世界に送ってくださり、私たちに新しい命を与えようとしてくださっておられるんだ。そうではないか。どうでしょうか。

今、私の説教を聴いてくださっている方の中で、もしかしたら一人でこの礼拝説教を聴いて、礼拝を捧げておられる方もおられると思います。一人だから、礼拝じゃないと思われる方がおられるかも知れません。そんなことは、決してありません。あなたがこうして信仰をもって、キリストのあとに従おうとしておられる。そのためには、それ以前に多くの方があなたに真理の言葉、伝道の言葉、御言葉を語ってくださった。取り次いでくださった方が居たじゃないでしょうか。その方々が連なって、そしてその御言葉があなたのとこに伝わってきたと思います。その方々の中には、すでに天の御国へと行っておられる方もおられるかと思えます。あなたが一人で、そこで礼拝をしておられる。しかし、天には、そのあなたに御言葉を語り継いだ、その方々も共に、一緒に今礼拝をしてくださっているんじゃないか。一人じゃないよと、生きよと、本当に私たちが天の応援席で見ているよ。御言葉を取り次いでくださった。今度は、私たちがその創られたものの初穂となさるためというのは、その私たちが今度はその誰かに御言葉を伝えていく、語っていく。私たちがしなくても、神様が私共を通してさらに新しい次の新しく生まれるものを、信仰者を創ってくださるならば、私たちはいつも一人ひとりがその初穂となるんだ。この自分を通して、救いへ、さらに繋がっていく。そういう事ではないでしょうか。ペンテコステで伝えられた聖霊は、ずっと今も私たちに働き、ずっと私たちを通して、さらにずっとこれからも働き続けて、御言葉が語られ続けていくと、そのような大きな流れの中で、私たちが礼拝をしているのだということを、覚えるものでありたいとそう思える者でありたいと、そう思います。

お祈りをします。

天の父なる御神様

どうぞ今、私たちを守ってください。それぞれの礼拝を支えてください。

今、こうしてあなたの前で頭を垂れ、そして自らの罪を告白致します。

本当に自分勝手にあなたのことを呪ったり恨んだりしています。

でも、そんな私たちをもあなたは赦し、洗い清め、

なお良きものを与えようと望んでくださっているのが、

生きよと言ってください。そして、新しい命に、復活の命に生きよと

招いてくださっていることに心より感謝致します。

どうぞ、その声にしたがって、自ら心の扉を開けていくものとなりますように、導いてください。

今の時を感謝しつつ、この祈りイエスの御名を通してお捧げ致します。 アーメン